

同一の胃に悪性リンパ腫と癌腫が共存する症例は非常にまれで、文献的に検索した結果、本邦においての報告は本例を含め24例である。この場合、癌腫は早期癌であることが多く、25例中15例を占め、一方、悪性リンパ腫は進行したものが多く、sm までにとどまるものは本例を含めわずか3例であった。このことより、両者が共存する場合、悪性リンパ腫は癌腫の発生前に先行するのではないかと考えられた。今回我々は、76歳女性で、1年2カ月という長期的観察を行ない、悪性リンパ腫発生7カ月後に同一部位より2個の分化型早期癌の発生を確認した症例を経験したので、若干の文献的考察を加えてここに報告する。

10) 原発性小腸悪性腫瘍の3例

草間 昭夫・川合 千尋 (日本歯科大学)
真部 一彦・松木 久 (外科)

小腸原発の悪性腫瘍は比較的希な疾患であり、全消化管悪性腫瘍中約2%で、癌は十二指腸に、肉腫は主として回腸に多いとされている。今回我々は、小腸の非上皮性悪性腫瘍を3例経験した。第1例は、回腸末端部原発の悪性リンパ腫、第2例は、回腸原発の平滑筋肉腫であり、いずれも腹部腫瘍を主訴に入院し手術が施行された。もう1例は、胃癌術後で、上部空腸に原発した悪性リンパ腫による穿孔性腹膜炎で、手術が施行された症例である。何れの症例も、術前の確定診断の成されないまま、やむなく手術が施行された。今回、小腸原発悪性腫瘍の術前診断の難しさと重要性を痛感したので若干の文献的考察を加え報告する。

11) 昭和54年6月よりの7年間当科で手術した大腸・直腸癌64例の実態と予後について

本間正一郎・小林 英司 (県立六日町病院)
高橋 辰弥 (外科)

魚野川最上流域(人口5万8千人)を診療圏として昭和54年6月新築移転以来7年間当科で手術した大腸・直腸癌64例を検討した(昭和61年5月現在)。症例数(性、年度、部位)、手術(緊急・予定、回数、入院期間合併症手術数)、予後(術後管理、死因、死亡場所)等。

①症例は近年著増(昭和60年度20例)。しかし70才以上が過半(39/64)、しかもその半数が緊急ないし準緊急手術例(20/39)。

②初回手術入院死4例(縫合不全2, その他2), 合併症手術8例(縫合不全3, 癒着性腸閉塞2, その他3)。

③死亡29例中脳卒中1例, 虚血性腸閉塞(推定)1例

以外原病死。また末期入院死亡12例(うち2例内科依頼), 末期入院自宅死4例, 自宅死9例。

以上より臨床的問題点として診断面の他に縫合不全対策(open suture method, 変則3層腹壁閉鎖), 術後補助療法(動注等), 末期医療対策(ホスピスの苦痛除去等)が挙げられた。

12) 虫垂粘液嚢胞の2例

渡辺 和夫・原 滋郎 (県立小出病院)
大村 康夫 (外科)

急性虫垂炎をはじめ、回盲部周辺の疾患は、極めて多いが、その中で、比較的稀な虫垂粘液嚢胞を2例経験したので、報告致します。

症例1 71才、女性。右下腹部痛にて来院。回盲部腫瘍、熱発、白血球増多より、急性虫垂炎の診断にて手術。虫垂は嚢腫状に腫大し、回盲部への癒着、炎症著しい為、回盲部切除術施行。病理診断は mucinous adenoma of appendix。

症例2 64才、男性。胆石症術後1年目、右下腹部腫瘍触知され入院。CT、CF等にて虫垂腫瘍の疑いにて手術。虫垂は、根部を残し、嚢胞状に腫大し、虫垂間膜や回盲部周囲には、リンパ節腫大や、腫瘍性変化を認めなかった為、虫垂切除術施行。病理診断は、mucinous adenoma であった。

以上の症例報告に若干の文献的考察を加えて、報告する。

13) 消化管粘膜下腫瘍35例の検討

高野 征雄・工藤 進英
丸山 明則・金子 一郎 (秋田赤十字病院)
広川 恵子 (外科)

過去15年間に当科で経験した消化管粘膜下腫瘍35例について検討した。病理組織学的には悪性腫瘍13例(悪性リンパ腫6例, 平滑筋肉腫5例, カルチノイド2例)と良性腫瘍22例(平滑筋腫7例, 迷入腺4例, 脂肪腫, 線維腫, その他)であった。発生部位は、食道, 胃, 十二指腸, 小腸, 大腸, 直腸と全ての消化管に認められたが胃に22例と最も多く見られた。最大腫瘍径は良性腫瘍の多くは3cm以下であったのに対し、悪性腫瘍ではほとんどが5cm以上であった。術前に良悪性を鑑別する事は困難な場合が多いが最近経験した悪性腫瘍6例で頻回な内視鏡下生検, CT, 血管造影にて術前診断が可能であった。悪性腫瘍では、消化管癌に準じたリンパ節郭清を伴う術式が選択されたが、絶対治癒切除術を行い得た8例は全例予後良好で最長14年生存中である。以上より